

本日は、「精神科医療の身体拘束を考える会」の設立記者会見にお集まり頂き、有難うございます。

私は、東京にあります、杏林大学教授の長谷川利夫と申します。

皆さんは、「身体拘束」というものをご存じでしょうか？

(実際の拘束具を記者に見せる)

これが、実際に身体拘束を行う器具です。

(実際に身体拘束をされている写真を見せる)

これを身体に装着するとこのようになります。



身動きを取ることはほとんどできません。

とても苦しい状態になります。

人権上も大きな問題があります。

日本の精神科病院の状況をお知らせします。

日本の精神科病院には、29万人の人たちが入院しています。

その内、20万人以上が1年以上入院し続けている人たちです。

驚きませんか？

日本全体の病院の病床数は、150万床です。つまり、日本全国の病床の5つに1つは、精神科のベッドです。

1960年代、欧米では、病院中心の精神医療から、地域中心の精神医療に変えていった時に、日本は逆に精神病床を増やしていったのです。その結果、2017年現在も1000を超える精神科病院に多くの長期入院患者がいます。つまり、日本の精神科医療は未だに、「隔離収容政策」から脱していないのです。

しかも、精神科病院に入院する人の平均在院日数は、約280日です。

日本においては、このような異常な精神医療の状況下で、隔離や身体拘束が多く用いられています。

先ほど、日本には29万人、つまり約30万人の人が精神科病院に入院していると言いましたが、国の最新のデータでは、このうち、隔離を受けている人が1万人、身体拘束を受けている人も1万人いることがわかっています。2万人に人が隔離や身体拘束を受けているのです。今、記者会見をしているこの瞬間も。

精神科病院の中で身体拘束を受ける人の数はここ10年で2倍にもなりました。



私自身は、精神科医療の身体拘束をテーマに2010年に論文を書き、博士の学位を取得し

ました。

2013年に急増しつつある身体拘束に警鐘を鳴らす意味も込めて、『精神科医療の隔離・身体拘束』を上梓しました。その後、精神科医療での隔離や身体拘束の急増問題について、様々な所で講演をするなどして縮減を訴えてきました。

しかし、縮減どころか、隔離も身体拘束も異常な増加を続けています。

サベジさん一家、千葉さん一家に起こってしまったことは、このような日本の精神医療の状況下、起こるべくして起きたのです。

主催者を代表して、2つお願いがあります。

サベジさん、千葉さんに起こった悲劇に対して、無念にも亡くなっていったサベジさん御子息、千葉さん御子息、その残された遺族に対して、どうか心を寄せてください。

もう1つは、どうかこの悲劇を、スキャンダラスな「事件」ということでなく、社会における様々な構造的な問題によって引き起こされていることを理解し、その解決に向けて共に考えて欲しいのです。

私たちが「精神科医療の身体拘束を考える会」を立ち上げるのは、まさに、日本の精神医療の問題を市民、国民と共に考え、解決していくためなのです。

会の方針は以下の通りです。

◆私たちは、身体拘束が人の尊厳を傷つけ、命まで奪いかねない非人道的なものであるか共通の認識をもつ。

◆身体拘束によって苦しめられた方々からの話を多く収集し、その実態を社会に知らせる。

◆身体拘束実施過程の可視化など、身体拘束が適切に行われているか事後に検証できるシステムの構築を目指す。

◆不必要な身体拘束をなくし、その実施を縮減していくことを目指し、広範な市民と連携していく。

会を立ち上げ、今、この瞬間も日本の精神科病院の中で行われている隔離や身体拘束を減らし、悲劇を繰り返さないためには、今日お集まりの第一線のメディアの方々はこの問題への深い理解が欠かせません。私たちはその理解を進めていくために力を尽くすことを惜しみません。

今日を機に、どうか末永くお付き合い頂けることを心から願っています。

連絡先は、杏林大学 保健学部 作業療法学科 教授 長谷川 利夫

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1

TEL： 0422-47-8000 Ext： 2512

携帯電話：090-4616-5521

E-mail：hasegawat@ks.kyorin-u.ac.jp